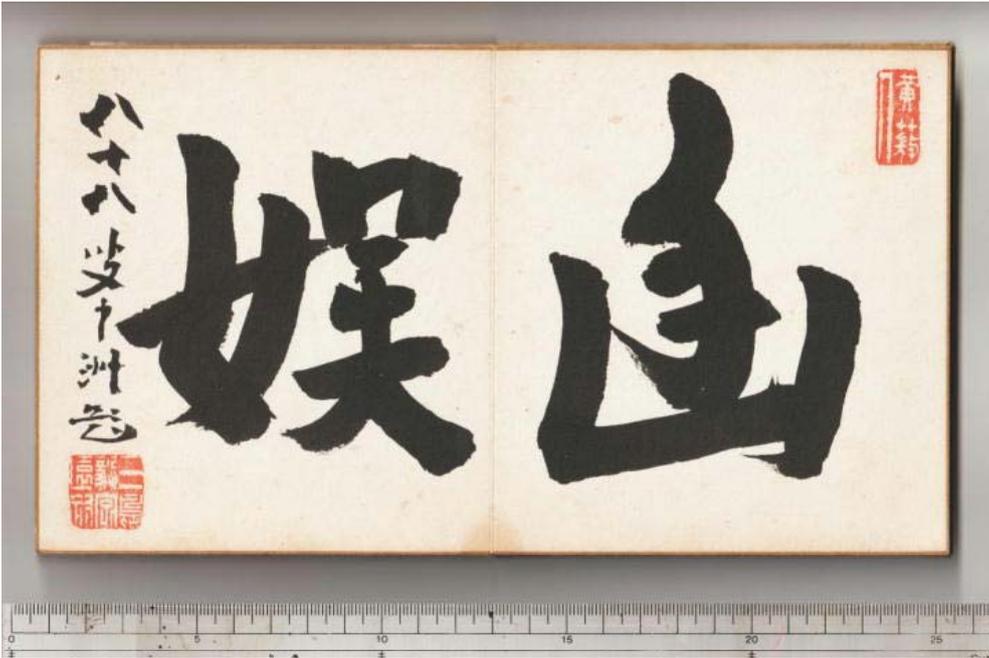


松本芳翠舊藏《幽娛帖》揮毫者略歴小傳



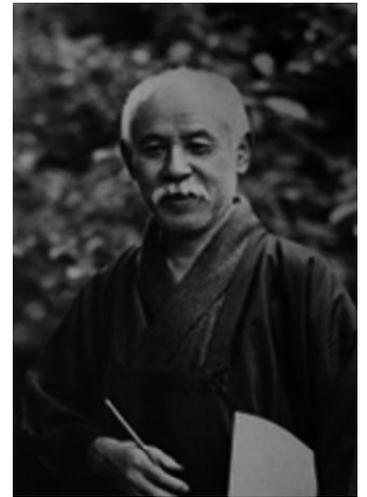
「幽 娛」八十八叟 中洲題
【三島毅字遠叔】【黄口人】

三島 中洲〔みしま ちゅうしゅう、文政13年12月9日（1831年1月22日） - 大正8年（1919年）5月12日〕は、江戸時代末期から大正時代の漢学者、東京高等師範学校教授、新治裁判所長、大審院判事、東京帝国大学教授、東宮御用掛、宮中顧問官、二松學舎大学の前身となる漢学塾二松學舎の創立者である。重野安繹、川田甕江とともに明治の三大文宗の一人に数えられる。正三位。大東文化協会初代理事長。本名は毅で、字は遠叔、通称貞一郎、中洲は号。地元の名族三村氏の子孫を称した。



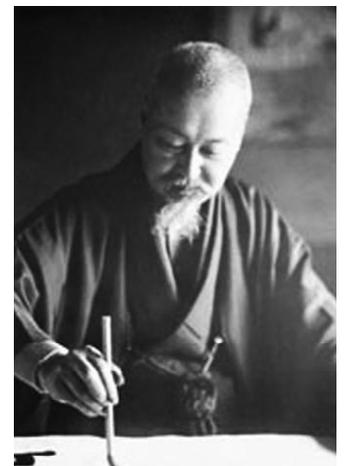
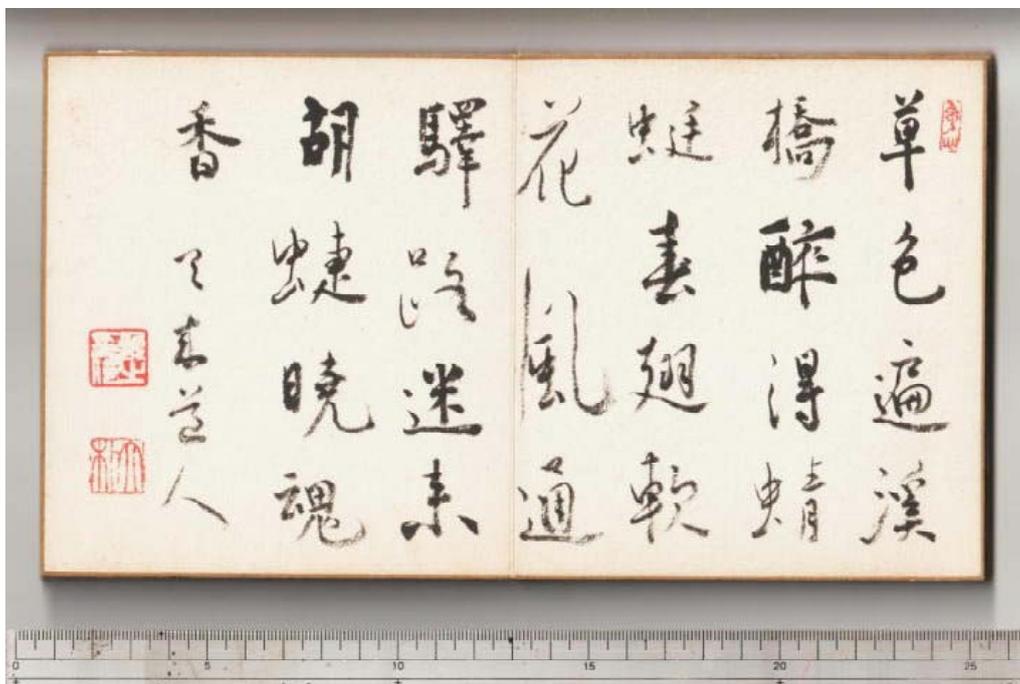
「學篆興來時、偶然寫蘭石。
蘭疎而石頑、一咲古心適。」
八一翁 野雀戲墨
【東】【作】【玉蘭軒】

日下部 鳴鶴〔くさかべ めいかく、天保9年8月18日（1838年10月6日） - 大正11年（1922年）1月27日〕は日本の書家である。本名は東作。字は子暘。別号に東嶼、翠雨、野鶴、老鶴、鶴叟などがある。中林梧竹、巖谷一六と共に明治の三筆と呼ばれる近代書道の確立者の一人である。中国、特に六朝書の影響を受けた力強い筆跡が特徴であり、それまでの和様から唐様に日本の書法の基準を作り変えた。加えて数多くの弟子を育成、彼の流派を受け継ぐ書道家は極めて多い。芸術家としても教育者としても多大な功績をあげたことを称えて「日本近代書道の父」と評されることもある。鳴鶴の流派は鶴門と呼ばれ、その門下生は3000人を数えたと言われる。また生涯で1000基の石碑を書いたとも言われ、現在も全国に300基以上の碑が残されている[1]。中でも大久保公神道碑は鳴鶴の最高傑作といわれる。



「奇文共欣賞」不折山人
【不折】

中村 不折〔なかむら ふせつ、1866年8月19日（慶応2年7月10日） - 1943年（昭和18年）6月6日〕は、明治・大正・昭和期に活躍した日本の洋画家・書家。正五位。太平洋美術学校校長。夏目漱石『吾輩は猫である』の挿絵画家として知られる。中国の書の収集家としても知られ、唐代の書家である顔真卿の現存する唯一の真蹟といわれる「顔真卿自書建中告身帖」などを収集し、1936年に台東区根岸の旧宅跡に書道博物館（現：台東区立書道博物館）を開館した。



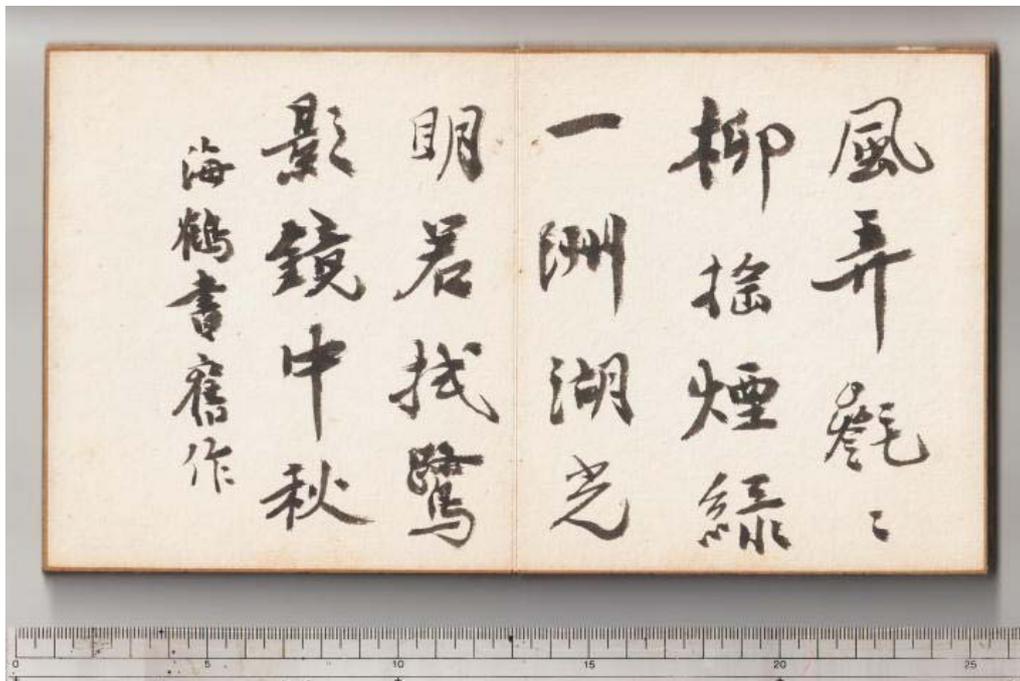
「草色遍溪橋醉。得蜻蜓春翅軟。花風通驛路迷。來胡蝶曉魂香。」天來道人
【象之印信】【大朴】【□心】

比田井天来〔ひだい てんらい、1872年3月2日（明治5年1月23日） - 1939年1月4日〕は、日本の書道家。「現代書道の父」と呼ばれる。本名・鴻。雅号は天来、別号に画沙、大朴、象之、淳風も用いる。長野県北佐久郡片倉村（現・佐久市）生まれ。幼名は常太郎。古碑法帖を多角的に研究し、古典臨書の新分野を開拓し、その集大成として『学書筌蹄』がある。俯仰法の解明をし、剛毛筆を使用して古典を分解再構築し、新しい造形世界を展開したその活動は、近代日本の書道界において新境地であったとされる。また、仁和寺伝来の三十帖冊子の橘逸勢筆の部分を見破したことで有名である。



「竹の春 雀千代ふる
お宿かな」
小波【小波】

巖谷 小波〔いわや さぎなみ、1870年7月4日（明治3年6月6日） - 1933年（昭和8年）9月5日〕は、明治から大正にかけての作家、児童文学者、口演童話家、俳人、ドイツ文学者、ジャーナリスト。本名は季雄（すえお）。別号に漣山人、楽天居、大江小波等がある。日本初の創作童話『こがね丸』（博文館、1891年）を発表して近代児童文学史を拓いた日本児童文学の先駆者と評される。明治期に児童文芸作品を表す言葉として「お伽噺」を使用、自ら編集長を務めた「少年世界」「少女世界」「幼年世界」などの雑誌を通して日本中に児童文学を広めた。個人による日本初児童叢書である『日本昔噺』（24編）、『日本お伽噺』（24編）、『世界お伽噺』（100編）などのシリーズを刊行、日本はもちろん世界中の伝承説話のリテリングを体系的に行った。『桃太郎』『金太郎』『浦島太郎』などの民話や英雄譚の多くは小波の手によって再生され、幼い読者の手に届いた。俳人でもあった小波は自ら開拓したお伽噺の世界を俳画の世界に融合させ、「お伽俳画」という独創的な世界を創り上げた。



「風弄毳々柳。搖煙緑一洲。
湖光明若拭。鷺影鏡中秋。」
海鶴書舊作。

丹羽 海鶴〔にわ かいかく、文久3年11月25日（1864年1月4日） - 昭和6年（1931年）7月5日〕は、岐阜県生まれの書家。本名は正長、幼名は金吾、字は寿郷、海鶴は号。晩年には落款に海雀とも書いた。日下部鳴鶴に師事。明治から大正にかけて活躍した書家で、鄭道昭や初唐の楷書を基調とした海鶴の書風は海鶴流と称され、一世を風靡した。また、書道教育界に影響を持ち、習字教科書の書風を改革して近代書道教育の発展に貢献した。



作者不明

晴遠？



作者不明

「虚心直节」

春塢寫【】



「燕樂春風」

雪峰 精【雪峰】

渡邊 雪峰〔わたなべ・せっぽう、明治元年（1868） - 昭和24年（1949年）〕日本画家。荘内藩儒篁所、新徴組隊士だった父平作の二男として出羽（山形県）庄内で生まれた。本名精次。山梨県の生んだ日本画家、書家。大沼枕山・長三洲・渡辺小華に学ぶ。1873（明治6）年、郷里下吉田村（富士吉田市下吉田）に帰住。以後少年期から画業を志し画を渡辺小華に、漢学を広瀬青村、書を長三洲にと一流の師に学んだ。1888（明治21）年、佐野常創立の龍池会が日本美術協会と改組されるや発足時から参加、審査員、幹事を歴任した。1902（明治35）年、東京に居を移し麹町区5番町に日本文人画協会を創立、以後ここを中心に活躍した。書家としての経歴も長く日本書道会審査員、書壇院顧問など。雪峰の画は南宋画だが自らは士大夫的な日本文人画という語に終生固執した。81歳で富士吉田市福源寺の寓居で没した。墓は同所にある。



芳翠先生舊藏『幽娛帖』（小冊子）

芳翠先生の遺愛品の中に、自ら『幽娛帖』と題箋した小冊（縦14×横12・5cm）がある。その内容を見ると、①三島中洲の題字『幽娛』、②日下部鳴鶴畫賛『蘭石圖』、③中村不折畫題『人物圖』、④比田井天來行書『六言絶句』、⑤巖谷小波俳畫『雀のお宿』、⑥丹羽海鶴行書五絶『舊作』とあり、題⑦開は瀟洒な『山水圖』で「晴遠？」と讀める落款と難讀な一印が鈴される。題⑧開は『墨竹圖』で「虚心直節」と題され「春？塢寫」と落款して、判讀不明な小印が二顆鈴されている。そして、最後が、渡邊雪峰畫『飛燕圖』で終わる。

大物揃いで、内容も楽しく、『書海』でも早く紹介したいと思っていましたが、中の二點の作者が判からず、その判明を待つて掲載すべきと思っていました。しかし、容易には判明せず、先の『萍蹤帖』二種の流れから、本號で紹介することにしました。

博識のご教示を賜れば幸いです。

明治・大正の文人交流の一コマ、芳翠先生の遺愛の品をご堪能下さい。